



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	青年期における友人の慰めが受け手の評価・感情に与える影響とそのメカニズム(論文要旨)
Author(s)	小川,翔大
Citation	
Issue Date	2015-03-17
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/139030">http://hdl.handle.net/2309/139030</a>
Publisher	
Rights	

氏 名 : 小川 翔大  
 専攻分野の名称 : 博士 (教育学)  
 学位記番号 : 博甲第 240 号  
 学位授与年月日 : 平成 27 年 3 月 17 日  
 学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士  
 学位論文名 : 青年期における友人の慰めが受け手の評価・感情に与える影響とそのメカニズム  
 論文審査委員 : (主査) 教授 中澤 潤  
 (副査) 教授 高木 秀明 教授 坂西 友秀  
 教授 小宮山 伴与志 教授 大芦 治

## 学位論文要旨

青年は友人からの慰めといった情緒的サポートを強く期待し (Argyle & Henderson, 1984), 友人から慰めを受けることで安心感を得て, 不安やストレスに上手く対処していく。しかし, 青年期では慰めのネガティブな側面が意識されやすく, 慰めによって友人を傷つける事を懸念して慰めが生じにくくなっている。また, 青年期の友人関係の質は中学生から大学生までに発達的な変化があり (榎本, 2000; 落合・佐藤, 1996), 親しい友人に対する欲求や期待は学校段階ごとで異なっている。

そこで本論では 6 つの研究を通して, 慰めが友人に与える影響の仮説モデルの生成および検証と, 青年期の友人関係の質の発達的な変化による慰められた時の受け手の感情の違いを検討した。そして, 検証結果を基に最終的なモデルを提示した (Figure 1)。

研究 1 では, 慰められた体験について大学生に半構造化面接を行い, 要因→評価→感情のプロセスを想定した仮説モデルを生成した。要因は, 「相手との親密さ」, 「相手の立場」, 「出来事の質」, 「慰め方」, 「出来事の原因帰属」といった 5 つの外的要因と, 内的要因 (個人差) に分けられた。評価は「相手の慰めの意図」, 「問題解決への有効性」, 「自分の能力への脅威」の 3 つ, 感情は「反発」, 「感謝」, 「自責」の 3 つに分けられた。

研究 2・3 では, 大学生を対象に, 「相手との親密さ」は感謝と反発, 「出来事の質」は感謝と自責, 「出来事の原因帰属」は自責との関連が検証された。特に, 「相手との親密さ」は慰めの受け手に与える影響をポジティ

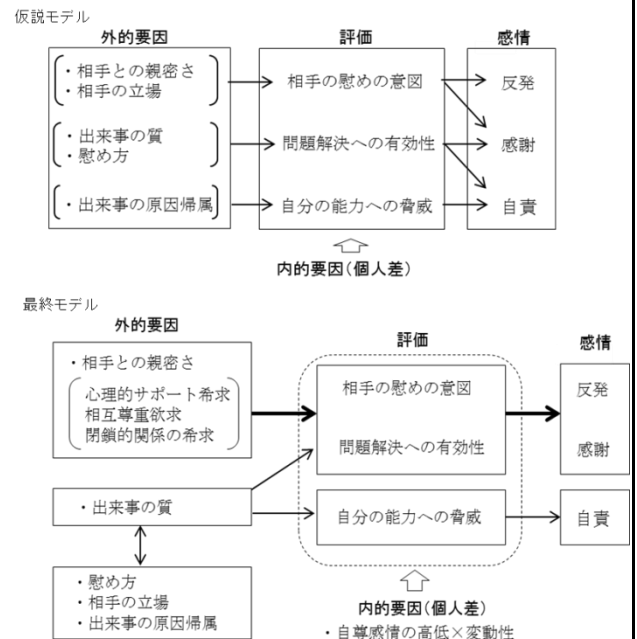


Figure 1 仮説モデルと最終モデル

ブ、または、ネガティブに分ける重要な要因であると考察された。

研究4では親しい友人から慰められた時の評価と感情の関連を、中学生、高校生、大学生を対象に検討した。その結果、「相手の慰めの意図」は感謝および反発、「問題解決への有効性」は感謝との関連が検証された。また、親しい友人が励ましや共感の言葉かけをする場合、受け手の感謝が高くなり、特に中学生と高校生でその傾向が強かった。これに対して、親しい友人が何もせずにその場を離れた場合、受け手の反発が高くなり、特に高校生でその傾向が強かった。

研究5では、「相手との親密さ」を深く掘り下げ、友人への欲求・期待（相互尊重欲求、心理的サポート希求、不安、閉鎖的関係の希求、ふれあい回避欲求、ライバル心）が、評価を媒介して感情に与える影響を、中学生、高校生、大学生を対象に検討した。その結果、「心理的サポート希求」「相互尊重欲求」「閉鎖的関係の希求」が「相手の慰めの意図」や「問題解決への有効性」の評価、または、感謝や反発と関連している事が検証された。また、中学生から大学生にかけて「心理的サポート希求」と「閉鎖的関係の希求」は低くなり、「相互尊重欲求」が高くなるといった友人関係の質の発達的变化が、慰められた時の感情の違いに影響していることが検証された。さらに、「相手の立場」は感謝と反発に関連し、「自分の能力への脅威」の評価は自責と関連していることが明らかとなった。

研究6では、自尊心の高低・変動性の個人内要因による感情の違いを、大学生を対象に検証した。自尊心が高い人は変動性に関係なく、非言語的な慰め（ただそばに寄り添う）が言葉的な慰め（励ましや共感の言葉かけ）よりもポジティブに働いていた。自尊心が低い人の内、自尊心が安定した人は言語的な慰めが非言語的な慰めよりもポジティブに働き、自尊心が不安定な人は非言語的な慰めが言語的な慰めよりもポジティブに働いていた。

以上、6つの研究を通して最終モデルが提示された。最終モデルでは評価的側面と感情的側面の2つの測定指標をモデルに組み込むことで、それぞれの感情が生じたプロセスの詳細が示された。例えば、慰められた時にポジティブ感情とネガティブ感情の両方が生じる場合は、「相手の慰めの意図」や「問題解決への有効性」の評価によって感謝が生じており、それと同時に、「自分の能力への脅威」を評価して自責も生じていた。本論によって提出された最終モデルでは、感謝と反発が生じるプロセスと、自責が生じるプロセスは異なることが示され、慰めの受け手に生じる複雑な感情を説明することが可能となった。

最終モデルの外的要因については、「相手との親密さ」の内、「心理的サポート希求」、「相互尊重欲求」、「閉鎖的関係の希求」が「相手の慰めの意図」と「問題解決への有効性」の評価を媒介して感謝と反発に影響することを示した。また、「出来事の質」はすべての評価と感情に影響することを示した。さらに「出来事の質」の違いによって、「出来事の原因帰属」、「慰め方」、「相手の立場」が評価と感情に与える影響が異なることを示した。最後に、内的要因として「自尊心の高低×変動性」が評価全体に影響することを示した。

以上より本論では、青年期における友人への欲求や期待の違いも考慮した、慰めが受け手に与える影響のメカニズムを明らかにした。